

平成 29 年 5 月 8 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	人文社会科学研究科 M2	性別	女
卒業/修了 予定年月日	平成 30 年 3 月卒業予定		

2. 留学の概要

留学期間	開始年月日	2016 年 10 月 15 日	終了年月日	2017 年 4 月 14 日
留学のタイトル	多文化共生社会の立役者 日系アメリカ人からの学び			
留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい）（700 字程度）				
<p>「移民」という存在が日本の社会で意識され始めて早数十年が経つ。人不足を補う労働力として、また年間二千万人を越える観光客として、海外からやってくる人の波が鹿児島にも及んでいる。このような状況下では、異なる文化背景の人々が尊重しあって暮らす社会、所謂「多文化共生」社会を築く努力が求められる。</p> <p>本留学の目的は、「多文化共生」の現場を実践的に学ぶことにある。さらにその成果を鹿児島地域に還元することを目指す。カリフォルニア州は 19 世紀以降、鹿児島県人をはじめ、多くの日本人が移住した場所であり、州内には多くの人種宗教文化を持つ人々が共存している。私は学部時代から継続してカリフォルニア州の日系アメリカ人と他エスニック・グループの関係について調査してきた。その結果、それぞれの違いゆえにしばしば摩擦も起こるが、日系アメリカ人は自らの歴史を様々な形で用い、異なる人種や文化間の潤滑油として活躍していることがわかった。</p> <p>そこで本留学では、日系アメリカ人が活動の拠点としている日本街で調査を行い、多文化共生を推進する活動に実際に参加する。その現場で、彼ら自らの歴史がどのように語られ、伝えられ、多文化共生を推進する現場で用いられているのかを明らかにする。</p> <p>具体的には、地域の人々の活動の中心となっている<u>日系アメリカ人博物館</u>で、<u>ボランティア</u>を行いながら、<u>フィールドワーク</u>をする。また多文化共生を推進する活動の<u>関係者</u>や<u>日本街を拠点としている企業へのインタビュー</u>から、様々な背景の人びとが集う街でどのような問題が起こり、解決が試みられ、さらに「多文化共生」を実現するためにどのような努力がなされたのかを明らかにする。</p>				

3. 受入れ機関情報及びスケジュール

(1) 受入れ機関情報

	1ヶ所目の機関	2ヶ所目の機関	3ヶ所目の機関
--	---------	---------	---------

国・地域	アメリカ合衆国		
都市名	サンノゼ		
機関名 (英語)	Japanese American Museum of San Jose		
機関名 (日本語)	サンノゼ日系アメリカ人 博物館		
受入れ 機関 URL	http://www.jamsj.org/		

(2) 留学期間中のスケジュール 留学月数 (6) ヶ月 / 授業料申請 (有・●)

年月	留学先機関	国・地域	主な活動
2016年10月15日～	サンノゼ日系アメリカ人博物館	アメリカ	館内の展示物や資料、ガイドの方法などを学び、日本語でのガイドサポートや解説ができるようになる。各月に企画される博物館のプロジェクトに参加。これらは継続して行う。
2016年11月～12月	〃	〃	年末年始のイベントに向けての準備へ参加。人脈作り。
2017年1月～2月	〃	〃	日本街にフィールドを広げ、調査する。特に鹿児島にルーツがある人の調査を掘り下げ、帰国後有用な教育材料にできるようにする。
2017年2月～3月	〃	〃	日本街、企業、博物館、老人ホーム、各イベント会場でインタビューを中心にフィールドワークする。
2017年4月	〃	〃	これまでの調査で不足したところがないかチェックし、追加する。 これまでの活動のフィードバックを関係者に依頼し、こちらからのフィードバックもできるように資料を作成する

(3) 参加したプログラム (有・●) (複数選択可)

本学の協定校交換留学	名称記入	本学の協定校交換留学以外のプログラム	名称記入
本学以外の機関による留学プログラム	名称記入		

4. 留学の成果及びその測定方法 (300字程度)

成果発表 (論文、作品等)	○	単位取得		外国語能力		その他	○
<p>成果発表：帰国後にゼミで発表し、最終的には修士論文としてまとめる。また現地の日本町関係 Web サイトで情報発信することでフィードバックを得られるようにする。また、関係学会での発表を行う。日系アメリカ人に関する研究は蓄積のある分野ではあるが、彼らの歴史を用いた多文化共生を推進する地域活動を具体的に記述する点では、独自性があり、学術的社会的貢献が期待できる。</p> <p>その他：研究成果は、これまでにネットワークを築いてきた鹿児島の企業や団体と連携して、今後鹿児島で取り組んでいかなばならない多文化共生社会に向けた課題の解決に役立てる。</p>							

※当てはまる項目に○を付し、具体的に説明して下さい (複数回答可)

5. 上記 4. も含め、留学の目的がどのように達成できたか、留学で得たことは何か記述してください。

(500字程度)

今回の留学の目的は、先述の通り、サンノゼの日本街で歴史を用いた「多文化共生」を推進する活動を実践的に学ぶことにあった。さらに、現地社会の一員となり、様々な背景の人々が集まる現場で起こる現実的な問題と解決に、見るだけでなく参加する点も目標としていた。

私が留学した期間は、米大統領選の2週間前から影響の大きかった数ヶ月間を含んでいたため、社会の変化が顕著に現れた。大統領選前の日本街で行われていたイベントやワークショップは、やはり「日系の街」という土地柄に合わせて日本や日系をテーマにし、参加者もかなり偏っている印象があった。しかし大統領選後に計画されたイベントや内容が変更になったイベントは、内容・参加者ともに複数のエスニックを対象にしたものになっており、「日系史」というひとつの歴史から、イスラム系ラテン系などに関する現実問題に取り組み、「多文化共生」社会の更なる発展へ貢献する現場にメンバーとして参加することができた。この留学で得たことは本当にたくさんあるが、変動する現実的な「多文化共生」の場で活動できた経験が一番大きな成果である。

6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。(500字程度)

今回の留学での成果は、現実的な「多文化共生」推進の現場で動く経験であると述べたが、それを鹿児島で活かすためには、ふたつの側面から進めることができると考えている。第一に「教育」、そして第二に「地域」である。

主な活動先となった日系アメリカ人博物館では、当初、観光でやってきた人たちへの教育が大きい役割だと考えていたが、近年特に力を入れているのが、次世代である内外の若者に向けた教育であった。中高生向けの授業とワークショップはもちろん、ボランティアの機会やメンター制度も提供されている。内容の主軸は歴史を伝えることだが、その歴史から現実問題としての多文化共生を考え、活動するきっかけが提供されていた。鹿児島でも、その経験を活かし、中高生向けに授業やワークショップの提供を行い、次世代の教育に助力する。具体的には、2つの高校での日系人と鹿児島のつながり、また多文化共生社会に関するワークショップ・講話を予定している。

また、今現在起こっている問題に経験を活かすためには、「地域」に入る必要がある。鹿児島は魅力的だ。しかし、住民の、外国人や英語に対する苦手意識が大きすぎるために、伝える機会を逃している。外国人観光客に地域の魅力を体感してもらい、さらに住民の苦手意識が薄まれば、双方が衝突しない、「多文化共生」的な観光に一步近づくのではないだろうか。その仲介役になれるように、現在、薩摩川内市甕島のベンチャー企業で、島内の英語対応や実際に観光にやってきた人たちが地域の人たちと一緒に楽しんでもらえる企画携わっている。

7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。(500字程度)

今回の留学では、サンノゼという多人種多文化多宗教地域に入り込んで動く経験をした。当初、サンノゼ日本町はひとつのエスニックによる街だと考えていたが、実際は日系をはじめ、複数のエスニックが混在する場所であり、さらに日本町から一步出ると、低所得者・不法滞在層の住宅やホームレスの集まりなど、鹿児島では普段目にする事のなかった現実が立ち現れた。その中で、プロジェクトを進めたり、人にものを伝えたり、身体を動かし、様々な問題に突き当たりながらも、最後までやり遂げる方法を考え、実行した経験は、今後の人生の中で非常に役に立つと思う。

今後、移民の増加やインバウンド効果などにより、日本の社会、鹿児島の社会は、日本人だけの集団ではなくなっていくことは確実であり、さらなる混乱もまた予想される。そんな中で、今回の経験を活かし、いち早く多文化社会に順応して、ものごとを進めていく人材となり、ひととひととの間に立ちたいと考えている。鹿児島の魅力、人のあたたかさが、文化間摩擦のために隠れてしまわないよう、次世代の教育・地方観光・企業からの多文化共生を少しずつ進め、鹿児島が多文化共生の先進地域になっていけるよう、助力したい。

平成 29 年 9 月 5 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）
留学後地域活性化報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	人文社会科学研究科 M2	性別	女
卒業/修了 予定年月日	平成 30 年 3 月卒業予定		

5. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。（700 字程度）

【活動のタイトル】 地域と学校から始める多文化共生社会実現への実践

【活動の期間】 2017 年 4 月 20 日～ 2017 年 6 月 30 日

【活動の概要】

今回の留学での成果は、現実的な「多文化共生」推進の現場で動く経験であると述べたが、それを鹿児島で活かすためには、ふたつの側面から進めることができると考えている。第一に「教育」、そして第二に「地域」である。

今回の留学で主な活動先となった日系アメリカ人博物館では、当初、観光でやってきた人たちへの教育が大きい役割だと考えていたが、近年特に力を入れているのが、次世代である内外の若者に向けた教育であった。中高生向けの授業とワークショップはもちろん、ボランティアの機会やメンター制度も提供されている。内容の主軸は歴史を伝えることだが、その歴史から現実問題としての多文化共生を考え、活動するきっかけが提供されていた。鹿児島でも、その経験を活かし、中高生向けに授業やワークショップの提供を行い、次世代の教育に助力する。具体的には、鹿児島情報高等学校と甲南高校での日系人と鹿児島のつながり、また多文化共生社会に関するワークショップ・講話を行う。

また、今現在起こっている問題に経験を活かすためには、「地域」に入る必要がある。鹿児島は魅力的だ。しかし、住民の、外国人や英語に対する苦手意識が大きすぎるために、伝える機

会を逃している。外国人観光客に地域の魅力を体感してもらい、さらに住民の苦手意識が薄まれば、双方が衝突しない、「多文化共生」的な観光に一步近づくのではないだろうか。その仲介役になれるように、薩摩川内市甕島のベンチャー企業で、島内の英語対応や実際に観光にやってきた人たちが地域の人たちと一緒に楽しんでもらえる企画携わった。

6. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。(700 字程度)



まず教育活動として、鹿児島情報高等学校(5月19日)での講話、甲南高校(6月16日)での授業二コマを開講した。鹿児島情報高等学校にはフレップ科、e-フレップ科という海外留学を在学中に必ず体験する科があり、その科の一年生から三年生、約120名が対象となった。講話では、国際社会・多文化社会の中で生きてい

くために英語以外では何が必要なのかなど、日系人史と自身の経験を事例にプレゼンを行った。質疑応答では、多くの生徒が手を上げ質問をしてくれた。担当の先生からも、生徒の反応の良さや英語の先を考えるきっかけになっていたことなどのフィードバックを頂いた。また甲南高校では40名×2回へ向け授業を行った。一年生の授業であったため、多文化社会を大学で学ぶことの面白さを中心にワークショップを複数行い、生徒たちの生き生きとした表情を引き出した。

また地域内部での活動は4月20日から5月15日まで行った。薩摩川内市甕島はこの数年で観光客からの注目度が増し、国内外からの来客が多い。今年度は地域おこし協力隊の方が活動として島内観光の英語対応準備や地域住民への英語教育を行っており、またIターンの若手による期間限定イベント「島の小さな屋台村」が開催され、住民がひとつの場に来ることが予想された。協力者の方々と話し合い、私はイベント主催側で働きながら、外国人観光客への対応を主に行った。主となる4日間でドイツ・アメリカ・香港・韓国などからの観光客が来島。昼間は観光の中心となるカフェと民宿、夕



方からはイベントの会場で、地域住民と外国人観光客、また国内からの観光客の間に立ち、相互理解の促進に努めた。英語での通訳と話題の提供、一緒に座って屋台村の食事をするように席をセッティングする、子どもたちの英語を助ける、などが主な活動だったが、外国人観光客からのフィードバックでは普通の旅行ではできない体験ができたことや地元のことを深く知れたことなどへの感想が寄せられた。(参考：<https://youtu.be/Mqz7yI3buFU>)